

研究員
報告②

けんし かんかん
見視観看「まちづくりアーカイブズ」

主任研究員 渡部 恭久

ECPRに配属され、早3年である。物心ついた頃からまちはそこに在り、当たり前前にそこに在り続けるものだと思っていた(いや、正確には「まちづくり」の定義について真面目に考えたこともなかった)私は、ECPRに配属されて初めて「まちづくりって何?」と考えるようになったのだった。

在籍中はまちづくり活動に熱心に取り組まれて多くの先輩方にご指導いただいた。中でも、岡崎直司氏には、舞たうん、近代化遺産調査、まち歩きガイド等でECPRと深く長く関わっていただいている。この度、岡崎氏が愛媛新聞「四季録」で執筆したコラムがまとめられ書籍として出版された。この

「まちづくりアーカイブズ」はまちづくりを理解するうえで必要不可欠な着眼点を私に与えてくれた。

特に印象に残っているのが、地域社会の変貌ぶ



まちづくりアーカイブズ

りを「ワラを必要としない社会」と表現されているところである。物心ついた時からワラを必要としない社会に育った私は、今大変な「生活の意味」の消失に直面しているのではないかと、自分でもよく分からない不安感を抱く。

また、建物の更新を「古い建物にとつてのお葬式」であり、「できるだけ見ないようにするのが人情でもあるが、それをあえて見ておく、記憶にとどめる」と、岡崎氏の精一杯のお見送りにには惜別の情と感謝の気持ちを感じる。

地域の歴史を「誰からも見捨てられた下で地域の歴史が雲散霧消する」「誰かが書き留めねばならない」と、岡崎氏の熱い言葉の数々から、次の世代に今に至る理由を伝えることの大切さを学んだ。

愛媛に固有の風土があったからこそ、固有の産業が生まれた。そして、生業によ

り人が集まり、この地愛媛を故郷として育つていった。連綿と続く人々の営みがあつたから今ここに自分がある。自分がここにいて、単なる偶然の積み重ねではなく、愛媛の風土が生んだ必然だ。

今と過去の関係が途切れてしまつては「生」を感じることができない。だから私たちは産業が作り出した風景を大事にする。過去を振り返らずには、今は語れないのだから。

「生業によってつくられる故郷の風景を通して、今自分がここにいる理由を考へること。これが「まちづくりって何?」に対する今の私の答えだ。

※「見視観看」はググってもわかりません。岡崎氏の本をメクってください。



わらぐろの模型